

巻 頭 言

数学のチャンスを広げよう

東北大学知の創出センター

前田 吉昭

2009年に、九州大学、東京大学、新日鐵株式会社（現、新日鐵住金株式会社）と日本数学会が共同で文部科学省からの委託事業「数学・数理科学と他分野の連携・協力の推進に関する調査」を行いました。当時日本数学会理事長であった坪井俊先生が中心となり、全国の数学・数理科学教育研究組織に対して、「他分野と産業界との連携・協力について」と「数学・数理科学における人材育成について」のアンケート調査を行い、その結果をまとめました¹。そのとき、私も理事の一人として、このアンケート調査と集計のお手伝いをさせていただきました。その調査から、十分な数学の素養を身につけた若手人材のアカデミア以外の分野への輩出が喫緊の課題であることが浮き彫りになりました。実際、このような博士課程修了生の就職難（いわゆるオーバードクター）の問題は、多くの研究教育分野での共通の問題ではありますが、数学・数理科学研究分野においては、基礎研究的要素が強い数学固有の問題に起因しているのではないかと感じられます。

日本数学会では、このアンケート調査のあと、若手研究者の社会への輩出や数学・数理科学研究分野の他分野との協働を目的とした数学振興ワーキンググループを立ち上げました。特に若手研究者の社会への輩出を目的としたキャリアパスセミナーを企画して、現在それを続けております。2011年3月の早稲田大学で予定されていた日本数学会年会にて第一回目のキャリアパスセミナーを開催する予定でしたが、東日本大震災により数学会年会が中止となり、それによってこの企画を開催することが出来ませんでした。その翌年3月に東京理科大でキャリアパスセミナーを開催することが出来ました。第一回目ということ、どのように運営すればよいか分からないこと等の不安の多い中、17社の企業の参加、100名以上の会員・学生の方々の参加をいただき、成功裡に終えることができました。その後、2013年3月には京都大学、そして今年2014年3月には学習院大学での年会にキャリアパスセミナーを開催して来ました。これらのキャリアパスセミナーの開催には、多くの企業のご協力と数学会会員の皆様の温かいご支援をいただきました。この場をお借りして感謝を申し上げる次第です。なお、今年のキャリアパスセミナーについては、数学通信に機会をいただいて詳細をご報告させていただく予定です。

¹ 報告書については http://www.math.kyushu-u.ac.jp/PDF/Report_No2.pdf をご参照ください。

キャリアパスセミナーを通じて一番感じているのは、産業界・経済界と数学・数理科学
学界とのマッチングの機会が少ないことです。キャリアパスセミナーの目的は、第一に産
業界と数学・数理科学との間の相互理解の推進、第二に数学・数理科学を専攻した若手人
材の産業界を含む社会へのキャリアパス構築です。これらの目的を達成すべく、現在も試
行錯誤を行いながらキャリアパスセミナーを今後も進めて行きたいと思っています。その
ためには、ぜひ数学・数理科学に携わっている日本数学会の会員の皆様のご理解が不可欠
です。実際に皆様が指導されている学生の今後については、勿論ご心配をされていると思
いますが、これを個々の力で解決することとともに、数学・数理科学学界が組織として問
題解決に向かう必要も十分感じております。その目的のために、産業界の協力や文部科学
省の支援も必要なのだと思います。ここ数年の間に、数学・数理科学の若手研究者の社会
への輩出について、前述した文部科学省の委託調査を含めて様々な活動が見受けます。文
部科学省でも数学イノベーションユニットが組織され、数学振興のサポートも始まってい
ます。さらに、昨年6月、学術界・産業界・経済界並びに文部科学省の有識者により、産
官学連携を通じた数学・数理科学のさらなる振興について議論する社会連携協議会を発足
いたしました。

今年のキャリアパスセミナーの講演のなかで、企業側からは、今年は全体的に就職状況
が好転するとともに、ICT技術等の進展に伴い、数学・数理科学が社会や産業へ貢献する
場は飛躍的に増加しているという意見が出ておりました。数学・数理科学分野に携わる数
学会会員の皆様にとっては大きなチャンスではないでしょうか。数学・数理科学の中では
様々な活動が行われており、それにより、数学・数理科学への関心が少しずつ高くなって
いると感じるのは私だけではないと思います。ある意味で、このチャンスを逃すと次の機
会はなかなか巡ってこないかもしれません。数学・数理科学の重要性をしっかりと感じ、ま
たその将来に危機感をお感じになっているのは、数学会の会員の方々にほかならないと思
います。我が国の数学力の向上とともに、十分な数学の素養のみならず社会に通用する素
養を身につけた若手人材の社会への輩出を考えることにより、数学・数理科学の次世代の
橋渡しをする時なのではないかと痛切に感じております。